

-世にも不思議なコイの物語-

平成 23 年 10 月 21 日の朝、私は 1 年振りに琵琶湖・磯漁港の岸壁に立っていました。平成 23 年度の秋季琵琶湖大会に併せて、琵琶湖へ出掛けてきたのです。1 年ぶりに来た米原の琵琶湖はとて 10 月下旬とは思えぬほどの陽気で、鏡のような静かな湖面はそれから起こるドラマを予感させる事は何一つありませんでした。

私は、前週の関東水郷大会で展示即売会を行った後、琵琶湖大会の商品の準備をして車に満載して、出掛けてきたのです。

いつものように米原から湖岸道路に入り、ポイントを見ながら暫く行くと、昨年竿を構えた磯漁港が目に入り、様子を見ると釣人はバサーが少し居るだけで、野鯉を狙う釣人は皆無で、昨年と同じ突堤の先端に陣取ることになりました。

天候は穏やかに晴れて、半袖の T シャツ 1 枚でも陽なたでは暑い位の陽気です。風も無く、べた風の湖面は鏡のよう...

まず、バケツ半分ほど龍王のダンゴを突堤先端にコマセした後、午前中はハリを付けないでスパイクオモリにダンゴを付けて 1 時間ごとにエサ交換して、野鯉の群れを寄せることに専念。

すると、夕方の 4 時半頃に待望のアタリが来ました。それもダブルで。しかし、取り込んだ獲物はどちらも 45cm と規定に足りない小型の野鯉でした。去年は大型が最初に来たのに較べると、今年は少し変です。

そして、次にアタリが来たのは夜の 9 時半頃の事でした。雨前の静かな湖面にいきなり激しいクリック音が鳴り響きました。

これもまた同時のダブルアタリ！

沖目に打ち込んだ一番左側の竿と突堤の入り口に打ち込んだ中央の竿が大きく閉めこまれて、リールが激しくクリック音を響かせています。

そこで、左端の竿から手にすると、強烈な手応えが返ってきました。大鯉独特のズシッとした重量感とトルクフルなパワーで中々寄せることができません。

それを少し強引に寄せて取り込むと、幅広な雌の 94cm の大鯉。そして、中央の竿に掛かっていたのは、中型の 65cm の野鯉でした。

それから暫くして激しい降雨となり、1 時間ほどするとクリック音を激しく鳴り響かせて次のあたりが来ました。これも、先程の大鯉よりパワーが強く、何度もラインを引きずり出すのを何とか凌いで取り込んだ獲物は、スラーと細長いゴンボと呼ばれる琵琶湖の地鯉で 96cm の大鯉でした。

そして、それから未明までアタリが続き、夜の中に 10 尾もの大漁となりました。

夜が明けてからは暫くアタリが途絶え、次のアタリが来たのは 10 時を回った頃でした。

ゆったりとしたクリック音を響かせながら、沖目を狙った竿が絞り込まれました。竿を手にすると、根掛りのような重い手応えで寄せることができません。

竿を立てて様子を見てみると、ゆったりとした野鯉の手応えが腕に伝わってきました。

これは、ひょっとして...

頭に大台の期待がよぎりました。強引に寄せに掛かると少し寄るのですが、また直ぐにラインをゆっくり引き出していきます。5 分ほど過ぎてようやく獲物が水面に姿を現しました。しかし、何か様子が変わります。白い腹を見せて寄ってきたのは、中型の幅広の雌鯉で、何と胸にハリ掛かりしているではありませんか。スレ掛かりだったのです。軽い発泡仕掛けが、警戒してエサの様子を見に来た野鯉のヒレで巻き上げられて胸に掛かったのです。

これで、今回は終わりかもしれないと思いながらもエサ交換をして 1 時間余り過ぎた昼下がりの午後 1 時、また激しいクリック音が鳴り響き始めました。

一番右の突堤の沖を狙った仕掛けです。竿を手にした時は既にかなりラインを引き出されていて、いやなラインの擦れる手応えが伝わってきました。突堤のテトラを巻いて昨年の大鯉と同じように本湖に向かっていくようです。そこで、昨年と同じように竿を手にしてテトラの上を先端まで行きテトラに擦れているラインを外すと、獲物は既に 80m 程沖合いまでラインを引き出していました。寄せようとする、却ってラインを引き出される始末で、昨年の大鯉より更に凄いやパワーで、中々思うように寄せることができません。

とにかく、足場の悪いテトラの上から取り込む事は出来ませんので、昨年と同じように奥の砂浜で取り込むことにしましたが、根掛りのように重くて中々自由になりません。

この騒ぎに気付いて地元のヘラ師が助っ人に来てくれました。そこで、タモを砂浜まで持ってきても

らうように頼んで、砂浜に移動。

こうなれば、慌てることはありません。問題はハリ掛かりの状態だけです。慎重に寄せて来ると、一瞬水面に赤銅色の巨体が浮かび上がりました。肩の盛り上がった大鯉です。

大鯉は最後まで頭をこちらに向ける事無く沖を向いたままゆっくり寄ってきます。そのためラインが背ビレに掛かり、獲物が身体を揺する度にラインが背びれから外れ、その度に一瞬緊張が走ります。

そして、何とか無事にランディングに成功。しかし、タモを持ち上げようとすると異常に重い。またもや、腰がギクッときてしまいました。それを何とか我慢して、検寸台の所まで運び重量を測ると、何と **21.5kg** もあるではないですか。全長は、**1m3cm**。

自己タイ記録の全長で、重量は自己新記録となりました。

その結果、この野鯉は第 **20** 回日本オープン琵琶湖野鯉釣り大会の優勝の荣誉に輝きました。

それにしても、商売に来て賞品まで戴くのは少し面映い心地です。

ところが、この鯉にはまだ余談があるのでした。

家に戻ってから写真をパソコンに取り込み、今年の鯉と比較してみると、大きさは違うものの如何にもそっくりなのです。

そこで、詳細に写真を較べてみると、エラに付いた縦線や上の部分の横線、肩の盛り上がり方、ウロコの状態まで殆ど同じなのです。

これは、どう見ても同じ個体としか思えません。

昨年リリースした場所は、磯漁港から **15km** 程離れた大同川でした。

しかし、過去にも長良川では、【よって鯉祭り】の時に南濃大橋でリリースした野鯉が **10km** 程離れた森下でまた釣れたという記録が残っています。同じ琵琶湖で、住み慣れたポイントに野鯉が戻っても不思議ではありません。

それにしても、この鯉の因縁には不思議なものを感じます。

実は、昨年釣れた時は **1m1cm** の大きさだったのですが、仲間の居る大同川へ持ち込んで検量してもらった時には **99cm** まで縮んでいたのです。しかも、大会では何故か連絡が行き届かず失格の憂き目に遭ってしまったのでした。

そして、今回は釣り上げた時は **1m4cm** だったのが、会長に現認して貰った時には **1m3cm** に縮んでいたのです。

しかし、今回は今年の轍を踏まないように大会本部に念入りに連絡し、**1m3cm**、**21.5kg** の申請が認められました。

そして、大会の釣果には同寸の **1m3cm** の野鯉があり、それを重量審査で抑えて優勝の荣誉に輝いたのです。

実は、同じ琵琶湖大会で今年の春にも私は **1m3cm** の野鯉を西之湖で釣り上げたものの、同寸の鯉があり重量審査の結果準優勝に甘んじた覚えがありました。

今回の釣果は、今年の春と秋の大会の両方のリベンジを果たしてくれたという結果となりました。それを昨年と同一の固体が昨年より一回り成長してくれたということには、何か不思議なものを感じないではいられません。

別紙に今年の同じ磯漁港の **1m1cm** の写真と、今年の **1m3cm** の写真を比較してみました。

サイズこそ違え、同じ鯉だと見えませんか？

琵琶湖・磯漁港で釣れた野鯉の比較写真



2010年10月23日 AM11:12 アタリ 1m1cm 17.5kg



2011年10月22日 AM12:30 アタリ 1m3cm 21.5kg